

第二百八十七回 青葉会

平成二十二年二月二十五日(木) 午後六時〜八時半

丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 福島正明 山崎亜也 山内天牛

山本三恵(終了間際)

〈投句〉

伊賀山そらお 大林猛 佐野明彦 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 南平和夫

宮内規雄 渡邊盛雄 赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎陽亮

〈紙上選句〉

小庵に内観の夜冴返る

万里子 (恭・正)

溶けながら目鼻際立つ雪だるま

全 (孤・く)

斑気(むらき)がち三寒四温の季に生まれ

全 (亜・陽)

(陽:自分の性格を生まれた季節の所為(せい)にする可笑しさ)

一つ目に気づき次ぎつぎ落の臺

全

竜天に登る速報カナダより

全

(珍しい季語使用のお薦め) : 村山古郷

〈互選句〉

九点 ☆ よちよちがぺたんと座る暖かさ

忠彦 (万・堅・恭・孤・敏・允・正・陽・天)

六点 ☆ 定價二圓祖父の著書繰る日永かな

恵洲 (万・龍・允・啓・陽・天)

(☆:著書繰る↓著を繰る)

(陽:私の著書も孫に読まれることがあるのだろうか?)

五点 ☆ 雪の朝歩幅の違ふあとを行く

忠彦 (万・龍・敏・正・天)

膝の子の漲る命山笑ふ

弘子 (清・恭・龍・允・く)

春待てず胸の釦を一つ開け

三恵 (堅・清・恭・敏・天)

(弘・亜:ボタンの方がいいのでは?)

雪解けの沢に一輪命吹く

全 (堅・清・忠・啓・く)

パンつつく焼鳥屋前の寒雀

忠彦 (清・弘・敏・亜)

☆ 春霞東京タワーを過去にして

弘子 (万・忠・正・亜)

☆ 新聞を取りに行く間の花粉症

天牛 (万・紀・正・陽)

(陽:何でもない日常の習慣を上手く詠んでいる。「行く間の」は「行く間も」の方がいいのでは。)

春雪や楽屋にゆつたり出番待つ

紀久男 (忠・く・天)

移設せし古民家の奥雛飾り

恭延 (堅・孤・亜)

眉毛まで雪つもりたる寒立馬(かんだちめ)

忠彦 (弘・允・く)

(孤:中七↓白くなりたる)

下萌や蕪村ゆかしき淀の土手

堂哉 (恭・孤・亜)

(孤:「春風馬堤曲」の世界)

(恭:昭和末期頃。絹湫先生の講義思い出す)

☆ 越の旅偲びつ雪見独り酒

ゆたか (万・龍・啓)

雪の朝膨らみ足りぬパンケーキ

正明 (孤・亜・天)

諸子焼くほろほろ苦く酒かろく

亜也 (紀・弘・く)

頬白のさえずり止まぬ座禅かな

そらお (龍・啓)

二点

☆ 節分や吉三(きちざ)の台詞口遊む
雪つもる樹々に野猿の坐禅かな

紀久男 (万・敏)
猛 (堅・忠)

鳥雲に磁石ゆれつつ北を指す
(野猿街道にて)

弘子 (弧・陽)

(陽：磁石が北を指すのは当然だが、尤もらしく言われると改めてそうだったなと思う。北帰行の鳥を見ながら磁石を見ている作者の姿が見える)
☆ 春の夜やジャック・レモンに惚れなほす
一過性なりき春愁も春風邪も

全 (紀・忠)
明彦 (万・忠)
恵洲 (恭・允)

一点
春招く声音(こわね)麗はし河東節
ギヤマンもありて御台の雛道具
愛犬死す寝顔のままに春の雪
楽しみ予約取消す春の雪

ゆたか (堅・紀)
亜也 (紀・弘)
天牛 (弘・敏)
清 (龍)

☆ 余寒風停車の度に忍び込む
竹の葉の影を取り込む春夕日
薄氷を踏んで危い橋渡る

紀久男 (允)
猛 (紀)
恭延 (万)
全 (啓)

☆ シュプールの思ひ出茫茫春炬燵
知らざりしとは白々し冬鴉
河東節春は活き活き紀尾井町
ぼんたんや重心低くカーリング

堂哉 (万)
明彦 (紀)
ゆたか (正)
正明 (紀)
全 (陽)

☆ 猫ざらひ恋猫の声に聞き惚れて
(陽：文旦の重量感と腰を落としたカー娘のどっしり感とが照合していて面白い)
(☆：↓恋猫の声に聞き惚れ猫ざらひ)

和夫 (万)

☆ 佐保姫や冬將軍とせめぎ合ひ
花未だ枝振りうれし紅枝垂
露のたう見つけしもの三ツばかり
(孤：↓見つけしは三つばかりの露のたう)
一面の野蒜香りて薄日さす
枯露(ころ)柿は信玄も食み我も食む
芥にも浮き沈みあり雪解川
ひとときは原始のやうに鬼やらひ

規雄 (紀)
亜也 (清)
全 (啓)
全 (清)
天牛 (弘)
盛雄 (清)
全 (紀)

● 次回青葉会

三月二十五日(木) 午後六時〜九時 (丸紅・談話室)
四月二十二日(木) 全 (全)
▲ 当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責

紀久男

